

飼料用トウモロコシの品種開発

飼料用トウモロコシの新親品種「Mi88」「Mi102」

【一代雑種の飼料用トウモロコシ】

一代雑種（F₁品種）は身近なところでは野菜の栽培品種にも利用されており、親品種に別の親品種を授粉して作ります。トウモロコシのF₁品種は雑種強勢により旺盛で斉一に生育するため、飼料用品種に適しています。ただし旺盛な生育はその名のとおり一代限りです。

【親品種の開発】

F₁品種の親品種は、自家受粉を繰り返して特性を固定します。生産者が使うF₁品種の特性は、親品種の特性によってほぼ決まります。そのため、優れた親品種の開発がトウモロコシ育種で最も重要な工程です。これまでに多数の親品種を開発しており、たとえば「Mi29」という親品種は、「ゆめそだち」「ゆめちから」「ユーデント」というF₁品種の親品種として利用されています。

【親品種の民間への提供】

九州研で開発した親品種は、生産者の栽培する市販品種の親として役立てていただくため、種苗会社などに積極的に提供しています。種苗会社では、九州研の親品種と種苗会社独自の親品種を交配してF₁を作成し、試験栽培で優れた組合せを選び、さらに親品種の採種量・採算性・営業部門の意見を総合してF₁品種の販売へと進めます。

【新親品種 Mi88、Mi102】

新しく開発した「Mi88」「Mi102」は耐倒伏性とごま葉枯病に強い親品種です（図1）。いずれも種苗法に基づく許諾契約を行った民間の種苗会社が親品種として利用しています。種苗会社はF₁品種名で今年から種子を販売し、それを生産者が栽培しています（図2）。トウモロコシ育種グループはこれからも親品種の開発と提供を通じて、普及品種の開発に貢献していきます。

【畑作研究領域 澤井 晃】

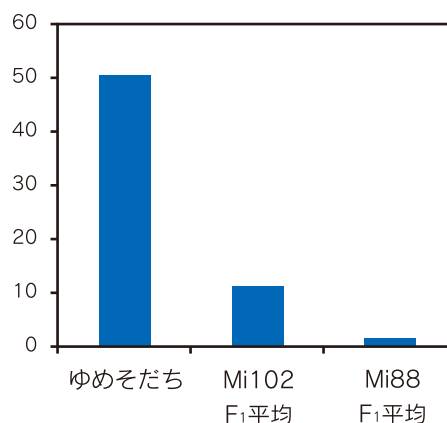


図1 倒伏個体率(%)

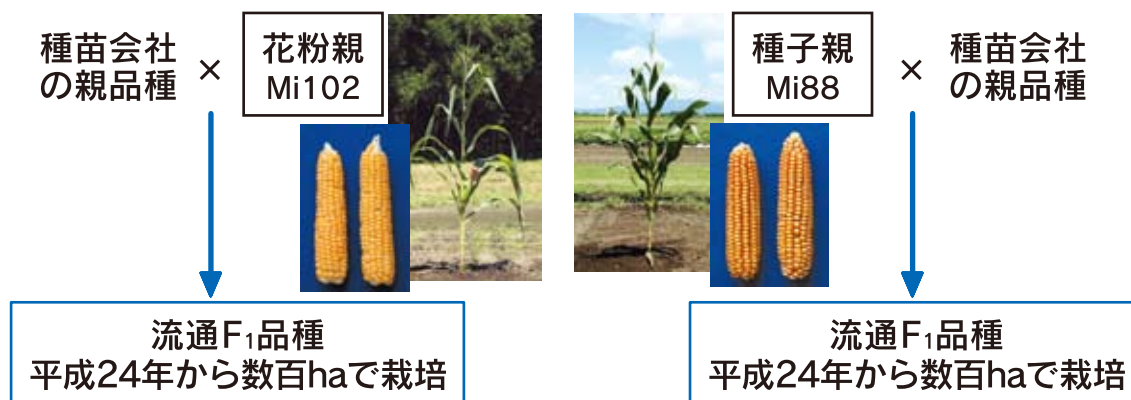


図2 親品種「Mi88」「Mi102」を利用した一代雑種（F₁）品種